ハンセン病資料館および多磨全生園のこと

旭川市医師会
旭川がん検診センター
西村（にしむら）　英夫（ひでお）

先日、平日に東京で一日、日が空いて、以前から行きたかった東村山市のハンセン病資料館と隣接する多磨全生園に行ってきました。池袋から西武池袋線で清瀬駅で降ります。そこから、久米川駅行きのバスで乗り換えて10分くらいです。

この辺りは病院が林立しており、国立病院機構の東京病院、救世軍の清瀬病院などもありました。ハンセン病資料館前のバス停があり、そこで降りると目の前です。周りは今は閑静な東京の郊外の住宅街でした。

資料館の中で多磨全生園の園長の鵜飼先生と落ち合いました。彼は以前、国病の仙台医療センターの副院長をしていて、転勤で数年前にいらっしゃったそうです。同じ、東北地方出身で専門も同じなので、親しくしていただきました。

資料館は国立で立派な建物と内容でした。

我々は、「砂の器」という映画や小説など、いろいろな資料である程度はわかっているつもりでしたが、やはり、本物を見るのは違いました。

戦後、特効薬が外国で作られ、日本でも東大薬学部の石館守三先生がハンセン病治療「プロミン」を合成され、彼は患者さんから神様のように思われたそうです。

それまで、きちんとした薬がなかったのに、当時の多磨全生園の患者さんにこのプロミンを静注したところ、顔面の結節の消失、視力の回復があり、石館先生が見舞った時には、患者さんが飛びかからんばかりの喜びようであったとのことです。

実は石館先生は旧制青森中学校出身で、仙台二高に行くときに浪人して、その時に手伝いで青森市内にある、松丘保養園に行き、初めてその実態を知り、自分はこの人たちを助けたいと思ったそうです。この話は我々青森出身の者は、郷土の偉人物語で昔、読んだものです。石館薬局は今も青森市内で店を構えています。

ハンセン病の施設は東北地方には２つあり、かつての北海道・東北の国立大学病院長会議ではよく同席させていただきました。青森と仙台にあります。

少年期に施設に送られた人が故郷に帰りたい、家族に会いたいとの望郷の手紙の展示もありました。また、このような事態を引き起こしたことをお詫びする記述もあり、国としても贖罪のために、この資料館の充実を図っているのがわかりました。

隣接する多磨全生園の中も案内していただきました。施設、環境は素晴らしいですが、かつてはここから出るのは逃亡という状態だったのかと思うと、感無量です。

びっくりしたのはキリスト教の教会が何か所もあり、仏教の寺も各宗派ごとにありました。かつては生きて出ることはかなわなかったので、各宗教ごとの最期のために教会、寺が作られたのですね。

園内は広く開放されていて、地域とともに生きるのが目標とのことでした。まるで公園のような様子で、園内は付近の人も散歩を楽しんだり、地元のスポーツ団が野球をしているそうです。桜の並木があり、かつて収容されていた方が花見を楽しみに植えたのが、今は大木となって園内で存在感を保っていました。園内で患者さんが柿をとっていました。職員が２人ついて手伝っていました。現在、入所者は100名弱で、北海道の方もいるとのことでした。それに対する医師、看護師、介護、事務職員は400名弱で至れり尽くせりの状態です。全員国家公務員で、これが国の謝罪の気持ちの表われなのでしょうか。

数年前に話題になった、樹木希林さんの主演の「あん」という映画の舞台となった、園内食堂で、東村山名物の黒焼きそばを食べました。

園内にある、お食事処なごみは誰でも利用できるようで樹木希林さんのおすすめの「東村山旅する小豆たち（ぜんざい）」が購入できます。

旭川から来たと言ったら、珍しがられ、いただきましたが、なかなかおいしかったです。

かつて、息子とポーランドのアウシュビッツ収容所を訪ねて行った折、ヨーロッパ中から何千人もの人が見学に来ていました。

日本においても、ハンセン病資料館は是非とも医療関係者が見学に行くべきものではないかと思いました。

園内に隣接して、コロナ禍の時にデータを送ったJANIS感染症のデータセンターがあったのも、時代だなと思いました。

写真は園内の教会の写真と樹木希林さんおすすめのぜんざいの袋の写真です。